

鬼形句選

上

道にたどりふかき翁ありけり。そのゆくやたかきより飛、ひくきより躍いづ。峻に立、ほそきをつたふ。されありき、おもむろにありく。夢のうき橋足さはらず、ふむにころよしとなん。世ばなればにや、おにつらといふ。むべ鬼なるかな。そのころ玉に金に、代にきこゆる句そこばくといへども、人のころにたらねばや、猶もとむ。予もとめて見き、にうつしけるが、漸かばかりにこそ侍り。七車といふ家の集は、世にあらはれねばよしなしや。あはれそれをもつたえて、あまねく鬼つらのおにたる無凝自在を、見もし學びもせば、わが芭蕉翁にこの翁を東西に左右し、延寶より享保にいたるこの道の盛世をてらし見て、けふこの道にゆく人の、ころの花のほひに足り、心の月の影とどきて、はいかいの幸大いならんかし。しか思ふものから、自笑が乞にまかせ、これに序してあとふる事になれり。

明和五年春二月 不取庵を紙

鬼母貝句選卷之一

春之部

大旦むかし吹にし松の風
ほんのりとほのや元日なりにけり

老松町

我宿の春は來にけり具足餅
中垣や梅にしらける去年の空
五器の香や春たつけふの餅機嫌
何おもふ八十八の親持て
雪よ／＼きのふ忘れし年の花

試筆

人語のほかにわかしで

旋頭句

烏帽子の顔ほの／＼と

何の花ぞもとしの花

六日八日中に七日のなづな哉
芽柳の遊ぶ鳥まだ寒けなり

不夜菴太祇考訂

風が吹梅のつぼみはしつかりと

初春詠

鶯が梅の小枝に糞をして
山里や井戸のはたなる梅の花
梅散てそれよりのちは天王寺
宿替に鼻毛も拔ぬ梅の花
鶯や梅にとまるはむかしから
うぐひすの鳴けば何やらなつかしう

軒の鶯 窓の鶯 蘭の鶯

枝の鶯 谷の鶯

うぐひすは山ほと／＼ぎすばかりなり

旅行

あふみにもたつや湖水の春霞
春の水と／＼に見ゆる哉
うち晴て障子も白し春日影
曙や麥の葉末の春の霜

しら魚や目まで白魚目は黒魚
日南にも尻のすはらぬ猫の妻

空道和尚、いかなるかはな
んちが誹眼と、とはれしに

即答

庭前に白く咲たる椿かな
水入て鉢にうけたる椿かな

夕霧が塚にて

この塚は柳なくともあはれなり
傾はおぼろ鳥のねざめ哉
ゆかしさのあて／＼しきや雉子の聲
草麥や雲雀があがるあれ下る

二月二日、京に住ところも

とめて

北へ出れば東へ出れば花のなんの
誰が家の醤油むすぶ春の草

骸骨を乞て、郡山をたちい

づる名残に

たよりなや笠ぬぐ後の春の雨
春の日や庭に雀の砂あびて

ひとり、舟にて伏見をくだ
る夜

おぼろく灯見るや淀の橋
月なくて晝は霞むや昆陽の池

玉水にて

山吹は咲かで蛙は水の底

佛前

きさらぎの日和もよしや十五日
何まよふひがんの入日人だから
人の親の鳥追けり雀の子
人に遁げ人に馴るゝや雀の子
遠里の麥や菜種や朝がすみ
雨だれや曉がたに歸る鴈
状見れば江戸も降りけり春の雨

里家春日

猫の目のまだ晝過ぬ春日かな
あら青の柳の糸や水の流
樹の中に只青柳の尾長鳥
住吉にて

みどり立きしの姫松めでたさよ

月晦が、つまにわかれし悼
春の夜の枕鳴やら目が腫れた

二月すへ、惟然にとはれて、
のち錢別

いなふとの花の前なりや止られぬ
春草の姿持たる裾野かな
鳥はまだ口もほどけず初ざくら

伊丹俗洗

賤の女や俗あらひの水の汁
から井戸へ飛そこなひし蛙かな
一銖や折敷にのせしすみれ草
春風や三保の松原清見寺
四日曉

浪の底に我足形の有やらん
永き日を遊び暮たり大津馬
一の洲へ都の客と馬刀とりに
桃の木へ雀吐出す鬼瓦
軒うらに去年の蚊うごく桃の花
杖ついた人は立けり梨子の花

黄檗山にて

ありのみのありとは梨子の花香哉

三月十日、はせを翁懷舊、
支考萬句興行に

かけまはる夢は燒野の風の音
それは又それはさへづる鳥の聲
富士は雪は花一時のよしの山
心あての花でよし野で餘をば猶
耻しの老に氣のつく花見かは
何くれと浮世をぬすむ花の陰
煩惱あれば衆生あり

骸骨のうへを粧て花見かな
摺鉢の花に賑ふ菴かな
花鳥に何うばゝれて此うつゝ

鐵那懷舊

うたてやな櫻を見れば咲にけり
花の頃扇さいたり諸職人

兵部太輔光成のもとより、
文の中に櫻の花を入れて、送
られし返し

九重の状より花のこぼれけり

去年も咲ことしも咲や櫻の木

さくら咲頃鳥足二本馬四本

日よりよし牛は野に寐て山ざくら

谷水や石も歌よむ山ざくら

此句、長伯老人より誹諧

歌傳受の時の吟なるよし、

人申はべる。

黒谷にて

盛なる花にも絶ぬ念佛かな

師弟のむすびせまほしくい

はれし人に

花のない木による人ぞたゞならね

大心禪師六十賀

順ふや音なき花も耳の奥

うつろふや陽の花に陰の花

又もまた花にちられてうつらく

定家卿の夢中に、抱とめた

まひしとなんきこへし、観

世音のたゝせたまふ御寺に

行て

花そなら散はや夢も抱くらむ

花散て又しづかなり園城寺

多田院花見

武士も見ながら散す花の風

咲からに見るからに花のちるからに

散花

又ひとつ花につれゆく命かな

鶯よ花はちるとも飛まはれ

野田村に蛭あへけり藤の頃

孝行

目は横に鼻は堅なり春の花

どつちへぞ春も末じやに又ねる歟

京に住ことありて、古郷を

はなれける春のすへ、友に

むかふて申いでける。

春雨の降にもおもふおもはれふ

彌生晦の雨を

春雨のけふばかりとて降にけり

雑

淀川にすがた重たや水車

初瀬に旅寐して

小夜更て川音高きまくら哉

闇の夜も又おもしろや水の星

塩尻は不二のやうなるものならん

池田唐船淵

むかしの海、中頃の淵、

今は田夫が騒まくらな

して夢となる。織女の歌

樂の跡をおもふて

棹の歌は松の聲のみ歟つゝみ

藏にゐて人には見えす白鼠

松風や四十過てもさはがしい

東山院御葬禮を拜み奉りて

御車は闇の月夜のなく音哉

鬼貫句選 卷之二

不夜庵太祇考訂

夏之部

春みてる夜、雑波より船に

のりて、明ぼの淀のわたり

を過けるほど

淀舟や夏の今来る山かつら
春と夏と手さへ行かふ更衣
一日で花に久しき袷かな

しれるものゝ尼のねがひあ

りて、西方寺に籠りけるを、

畧にまかせつかはしにとて

五月三日かの寺に行て

我はまだ浮世をぬがでころもがへ
戀のない身にも嬉しや衣がへ
花惜しむけも夏山の柴車
きかぬやうに人はいふなり時鳥

おなじ雲井のほとゝぎす

ほとゝぎす耳すり拂ふ峠かな
雲枕花の氣さむるほとゝぎす
津の國の玉川しれずほとゝぎす

傘のしるしに

此夏はいく度きかんほとゝぎす

鳥羽繩手を通りて

空に鳴や水田の底のほとゝぎす

江戸にて

あちらむく君も物いへ郭公
なまじいにくい夜むかしの時鳥

題吳猛

蚊をよけて親の躰や時鳥

夜の後灯白しほとゝぎす

奈良にて

神く〜と春日茂りてつゞら山
非情にも毛深き枇杷の若葉哉

みよしのゝ川上に、葉平の

隠れたまひし所とてありけ

るに、人の發句せよと望み

ければ、彼男のむかし杜若

の例にならひて、むばらの

花といふ言葉香かふりに

をきて

むかしとへば卵塔までの葉末かな

卯月廿七日西吟へ行て

葉なりとも西吟櫻ふところに

おなじく歸るさに

けふの日をさぞ五月雨におもひ出ん

橋にておのゝ發句せし時

雨ぞふる寐てたち花の起てもぞ

旅行の里

のり懸や橘にほふ解の内

心ならでまはるもおかし茶引草

つくく〜とおもふ

我むかし踏つぶしたる蝸牛哉

我が身の細うなりたや牡丹畑

後に飽蚊にもなぐさむはし居哉

猶信がつまにおくれし悼

夜もさぞな明やすひとは偽りと

海音快氣のよろこびに發句

乞れて

遣はなつ心車に飛ぼたる

卯月廿七日道閑といふ露師

の新宅にては句望れしを

此軒にあやめ葺らん來月は

端午

葦原や豊の粽の國津風

戀しらぬ女の粽不形なり

人の旅宿にて

壁一重雨をへだてつ花あやめ
螢見や松に蚊帳つる昆陽の池
藪垣や卒都婆のあいを飛ぼたる
野のすへやかりき烟をいづる月
さつき雨たゞふるものと覺へけり
五月雨にさながら渡る二王かな
さみだれや鮒のおもしもなめくじり

西吟興行

侘ぬれど毛虫は落ぬ庵哉
竹のこや雪隠にまで嵯峨の坊
やれ壺におもだか細く咲にけり

鶴飼

鶴とゝもにこゝろは水をくどり行
根は草の水に花置く池のうへ
大坂へ行て、東行興行に

草の花の水にまかせて根をひかへ
夕暮は鮎の腹見る川瀬かな

みや川町にあそびて

飛鮎の底に雲ゆく流かな

蜘蛛の巢はあつきものなり夏木立

營の聲なかりせば目白哉

といへるを今ならば

鶯や音を入れて只青い鳥

休斗新宅

夏菊に露をうつたる家居哉

探題 蟬

鳴蟬のその木にもまだ居つかぬ歟

鳴ぜはし鳥とりたるせみの聲

ゆく水や竹に蟬なく相國寺

巳夫にゑぼし着せて

夏草の根も葉もどちへどふなりと

京よりいたみへ行

水無月や風にふかれにふる里へ

さはくんと蓮うごかす池の龜

小町の繪のかゝりたる家に

て

すゞ風やあらむきたるみだれ髪

夏の日のうかんで水の底にさへ

松雨興行

なでし子よ河原に足のやけるまで

田家

六月や白をほそふぞつき白を

知牛老母死を悼

水無月の汗を離るゝほとけ哉

雲の峯なんぼ嵐の崩しても

夕立のまたやいづくに下駄はかん

夕立や隣在所は風ふいて

夏草に身をほめかれて旅の空

夕涼

なんとけふの暑さはと石の塵を吹

旅行

夏の日を事とも瀬田の水の色

獅子谷

涼風や虚空にみちて松の聲

旅行

あの山もけふのあつさの行衛哉

糺の涼

日盛を花とみたらし明日も來ん

夏の星の顔なつかしも暮かゝる

水無月の頃舎羅が刺髪しけ

るを

國々を秋になつたら見にまはれ

しらぬ人と詰問答すゞみ哉

冬は又夏がましじやといひにけり

難

しよろ／＼と常は流るゝ大井川

須磨に此あづまからげやしほ衣

山崎にて

木神せよ油しめ木の音ばかり

鬼貫句選 卷之三

不夜菴太祇考訂

秋之部

初秋

なんで秋の來たとも見えす心から
そよりともせいで秋たつことかいの

ひら／＼と木の葉うごきて秋ぞたつ

心略起て秋たつ風の音

此露を待て寐たぞや起たぞや

初秋雨

初秋のどれが露やら雨の露

あはれけもまたほめく夜の秋の風

朝も秋ゆふべも秋の暑さ哉

桐の葉は落ても下に廣がれり

下り舟にて

稻づまや淀の與三右が水車

人の親のくるとばかりや玉まつり

こゝろにて顔にむかふや玉まつり

こぼるゝにつけてわりなし秋の露

庭の萩

内蔵に月もかたぶく萩の露

高井立志健別

人むかふて笑ふ。わかれ

て思ふ。ゆくも百三十里、

とよまるも百廿里。

そちへふかばこちらへ吹ば秋の風

家は沙津ばしといふ橋のほとり也。前には軒の松風、

流水にひたして、なをひや

やかに、後には野徑の虫、

時しも野分に吹送るて、お

のれ／＼が聲かすかなり。

今は聞なれば、やがて月の

ためにばとたのしく覺えて

闇がりの松の木さへも秋の風

むかふは堂嶋の新地、家建

ならび、舟きおふ堀江の川

あらしに、西海の浪をわす

れ、入目を惜む歸帆、半は

屋上に見こして、萎しらぬ

旅人のわかれをおもふだに

此夕はさらにもかなし。

須磨の秋の風のしみたる帆艇か

野徑に遊ぶ

秋風の吹わたりけり人の顔

ねものがたりの里を通りて

ふむ足や美濃に近江に草の露

宵はいつも秋にかつ氣をむしの聲

行水の捨てころなきむしのこゑ

野はなれや風に吹くる虫のこゑ
獨閑虫

人呼にやるも夜更つむしの聲

右には武庫・淡路のつゞき

遠く聲へて、左は伊駒・か

づらきの峯はるかに高し。

來れる人もなければ、物理

む雲もなくうち晴て、致景

ことゝく歴なり。

有岡のむかしを、あはれに

おぼへて

古城や茨くろなるきりゝゝす

おもしろさ急には見えぬ薄かな

露の玉いくつ持たる薄ぞや

茫くとりみだしたるすゝきかな

吹からに薄の露のこぼるゝよ

此薄窓より吹や秋の風

ゆがんだよ雨の後の女郎花

今はむかしの秋もなくて

伏見には町屋のうらに鳴鶉

伊丹あたご火

あたご火に稻づま光るとひやうし哉

芭蕉にもおもはせぶりのうこん哉

思ひ余り戀る名を打碁かな

朝寒のけふの日なたや鳥の聲

來山が老母の死を聞て送る

句

おもひやる只の秋さへくらされぬ

老母の身まかりける夜

けふの秋にいつ逢とぞ親にまで

富士の形は、畫るにいきゝ

かかはるとなし。されども

腰を帯たる雲の今見しには

やはかり、其けしきもまた

くおなじからずして、新

なる富士を見ると、暫時に

いくばくぞや。あし高山は

おのれひとり立なば並びな

からん。外山の國に名ある

はあれど、古今景色のかわ

らぬこそあれ。

によつぱりと秋の空なる富士の山

夕ぐれにまた

馬はゆけど今朝の富士見る秋路哉

うら聲といふにもあらで鴈の聲

雁がねの跡に飛ゆくむら鳥

むかしから穴もあかずよ秋の空

來山が妻の追悼

萩の葉そよぐゆふべ、さ

よ更る砧、ねやにさし入

月かげ、つれてわたる雁

がね、人の妻の摺鉢の音。

うつゝな夜とは秋とは今ぞ嘸

蹈ては花をやぶり、ふまず

してはゆく道なし。

野の花や月夜うらめし闇ならよかる

老母をいざなひて

風もなき秋のひがんの綿帽子

旅泊

衣うつ京へは遠き寐覺かな

犬つれて稻見に出れば露の玉

家せばくておほからぬ道具

さへ置所なく、そこ／＼に
糊などつらせて、蜚のころ
までは晒し。やう／＼ほこ
りはき捨て安座す。

吹風や稻の香にほふ具足櫃

待宵

あすみちて明日かける月のけふこそな
秋はものゝ月夜鳥はいつも鳴く

名月 十九句

月よけふよ去年の命に花ぞ咲
珍しと我影さへや窓の月
月をとて漸く雲のちぎれ／＼
野も山も晝かどぞ首のだるくこそ
木も草も世界皆花月の花

述歌

見るほどはいはれぬ月の今宵哉

病後

しみ／＼と立て見にけりけふの月

夜半の雨後

名月や雨戸を明てとんで出る

更行や花は紙にも押ものを
此秋は膝に子のない月見哉

愚痴／＼と獨に更る月見かは
明なばの俤爰ら窓の月
月は此今宵に明て何ひとつ

父の身まかりける忌中の名月

虫も鳴月も更たり忌の中

名月くもりければ

春ならば朧月とも詠めふに

良夜大雨

しよぼ／＼に降なら月を／＼とも

十五夜雨ふりければ

何の木と見えて雨ふる今宵哉

どこ更る空のあてども雨の月
燈火やおのれがほなる雨の月

歌人は居ながら入唐す。

秋の月人の國まで光りけり

富士の山にちいさうもなき月し哉
見ぬけれど月の爲には外の演

中秋十七日女の身まかりけ

るを

ゆく水にうき世の月もきのふ哉

述懐

銀もてばとかくかしこし須磨の月
月代やむかしの近きすまの浦
榎の木のすんと立たたる月夜哉
遊女の繪に讃す。

どの方をおもふてゐるぞ閨の月

袖が浦といふ至に

うつ／＼なや現なの月の袖に／＼

後名月

名月や纒の闇を山の端に

後の月手まめなといふとを

豆を喰て豆の花とも詠ばや

後名月

けふは梢の松風も、くれ
ぬさきより東山の峯をま
ねきて、實非情さへとか
ゆ。猶頃さりて十五夜の
雨も、今宵の空に晴て月

明くたり。

跡の月雨の降時けふの月

十五夜も雨なりける、十三

夜もふりければ

又の月もあふのいてこそ甲斐はあれ

貞享四の秋長月十七日の夜、

更行まゝに庭のけしき人は

しらず。

今の心是こそ秋の秋の月

おなじ夜ねられぬほどにこ

こかしこをめぐりて

いと鳴猫の竈にねむるかな

破芭蕉やぶれぬ時もばせを哉

宗因墓

宗因は春死なれしが秋の塚

久かたや朝の夜るから空の菊

重陽

菊の香のひとつをのこす匂ひ哉

翁屋阿賀月次初會

よも盡じ草の翁を露拂

旅泊病

ながき夜を疝氣ひねりて旅ね哉

落穂拾ひ鶉の糞は捨にけり

古寺や栗をいけたる縁の下

しろくは紅葉の外は奈良の町

文臺記

みむろ山の嵐は立田川の

錦におち、別所山の紅葉

は今江原氏鶴賀の家にな

がれよりて、世に其名を

照す。

寸法は、

高サ 三寸壹歩

竪 壹尺八歩

横 壹尺九寸

裏には、

別所山満願寺尊悟寺住之時

興昌寄進之

と朱を以てならべたり。

蒔繪はむかしの秋、底に

匂ひて、夕に月をおもひ、

朝に奥山の聲をしたふ。

實月日としなへに流れ

てちらぬ影さへ眼に沈み

やをらししかたをおもふ

に、いくばくの人の心の

種となりけんぞと、知ら

ぬ言の葉の數さへする

に戀しくこそ侍れ。こと

し寶永ひのとの亥の秋、

菊の花むすぶ窓のもとに

筆を置ぬ。

むかし色の底に見えつゝ花紅葉

寄語無常

目をさませ後しらぬ世の紅葉狩

あゝ蕎麥ひとり茅屋の雨を白にして

草の葉の岩にとりあふ老母草かな

木にも似ず扱もちいさき榎の實哉

去程にうちひらきたる刈田かな

賀

言の葉の落穂拾ふもたのみかな

九月盡

むかしやら今やらうつゝ秋のくれ

雜

来いといふ時にはこいでをふいおい

戀

君もさぞ空をどこらを此ゆふべ

契不逢戀

油さしあぶらさしつゝ寐ぬ夜哉

鬼貫句選 卷之四

不夜菴太祇考訂

冬之部

あたゝかに冬の日なたの寒き哉
夕陽や流石に寒し小六月

大坂へ着て

つめたいにつけてもゆかし京の山

福島住居のとし

冬もまた松の木持てむかひけり
つくぐゝとものゝはじまる火燐哉
さゝ栗の柴にからるゝ小春哉
なんと菊のかなぐられふぞ枯てだに

物すこやあらおもしろや歸り花

世の中をすてよゝと捨てて

あとからひるふ坊主どもかな

古寺に皮むく櫻櫛の寒げ也

在郷

種なすび軒に見えつる夕かな
麥蒔や妹が湯をまつ頬かぶり
葉は散てふくら雀が木の枝に

宇治にて

冬枯や平等院の庭の面

枯芦や難波入江のさゞら波

久しく交りける友の身まか

りけるときこへ待りければ

いとさへ旅のね憂は物う

きを

木がらしの音も似ぬ夜のおもひ哉

ひうくゝと風は空ゆく冬牡丹

茶の花や春によう似た朝日山

皆人の匂ひはいはじ枇杷の花

川越て赤き足ゆく枯柳

青空や鷹の羽せゝる峯の松

白拍子の尼になりて、久し

くすみける庵に立よりて

引かへて白い毛になるつはの花

荒るものと知ばたふとし神送

時雨ても雫みじかし天王寺

おとなしき時雨をきくや高野山

野もかれ落葉さへなき頃、

關をくぐりて不夜城に入ば

花ありて寒塞からず。歌は

ふしなふて匂ひあり、聲は

こけるといふたぐひならて

玉あり。折ふしの雨、むか

しをそぼちて更にわれをせ

む。

糸に只聲のこぼるゝしぐれかな

ねられぬやにがくしくも鳴千鳥

千鳥鳴須磨の明石の舟にゆられ

汐波や千鳥のこして歸る海士

家鴨かとおもふ人なし沖の鴨

筑後三毛領にて

遠干萬沖はしら浪鳴の聲
水鳥のおもたく見えて浮にけり

おもふに花の頃より其かた
ち洲み、時鳥の聲きく夜毎
も、懶き閑さぞなにやあり

けん、散かゝる紅葉のころ
故郷を都にわかれて、立か
へる秋をしらぬ身のあはれ
さよ。はや時うつり一生爰
に盡て、月も日も十に満る
夜あらしに、鐵卵去て來ら
ず。是何者ぞ、我また是何
者ぞ。空々寂々夢又夢。それ
が中に親しみにひかれて、
きのふけふをばおもはざり
しをと、おもふもこれ又何
事ぞや。

いつも見るものとは違ふ冬の月
宵月の雲にかれゆく寒さかな

旅泊
膝がしらつめたい木曾の寐覺哉

夜話
灯火の言葉を咲すさむさ哉

待宵の頭巾や耳をあけてゐる
紙子着て見ぬ唐土のほとゝぎす

戯別

簗谷はかたちまで才覺あり。

漸のびて冬のゆく衡やよいつぶり

山家契

はづかしや楯にふすばる煙草頰。

初雪に友をまねきにつかは
しける。

我宿の雪のはしり穗見にござれ
白妙のどこが空やら雪の空
雪路哉薪に狸折そへて

十二月初雪

この雪が降ふくと師走まで
富士の雪我津の國の者なるか

寒苦

雪の降夜握ればあつき炭團哉
雪で富士敷富士にて雪かふじの雪

しれる人の中むつまじう、
今は關守もなくてたのしめ

る宿に行て

雪に笑ひ雨にもわらふむかし哉

おさなき子におくれし人の

もとへ悼て申つかはしける

ちらとのみ雪はうき世の花いな

飯後の雪を

鯉くふて其後雪の降にけり

ふぐと程鯉のやうなるものはなし

水よりも氷の月はうるみけり

井のもとの草葉におもき氷柱哉

何ゆへに長みじかある氷柱ぞや

朝日かげさすや氷柱の水車

寐て冷て空也きことて覺はせぬ

殊勝也牛の糞ふむ鉢たゝき

われが手で我顔なづる鉢扣たき

鉢扣古うもならず空也より

節季いや白こかし來て間がぬける

世の花や餅の盛りの人の聲

歳暮

惜めども寐たら起たら春であろ

月花を見かへすや年の峠より
花雪やそれを盡してそれを待
鏡を磨ふ春まつ老の若さかり
灯の花に春まつ庵かな
欄や髪かみの扇に年ゆく日
惜まじな壺のつばみとなる年を
君を月をまつ夜過こし春まつ夜

寐よぞねよ夢のゆく衛の年をまた
流れての底さへ匂ふ年の夜ぞ
雑

獨居の僧の庵に行て

燃る火に灰うちきせて念佛哉
人間に知恵ほどわるい物はなし

れど、用なきに身を遠く遊ぶ事、暫老親
のためにおもければ、こしかた見つくし
たる所、居ながら再廻のまなこをお
よぼし、日くころばかりを脱けてゆ
かば、我願ひもたり、不孝にもあらずと
おもひ立ぬ。

廿日の夕ぐれ大坂に出て、伏見への船か
りてのる。

我が身に秋風寒し親ふたり

ほのくらくころ難波の地をはなれて行。

草葉の露は左右おなじくをけど、船ひく

男らの岸づたひに、かたくは虫のねた

へて、是も物のあはれなるべし。江口の

里はまだ宵闇の覺束なく、川風は今も旅

人の枕に馴て、むかしの秋をしたひ顔な
るも、また哀に覺ゆ。

幽霊の出どころはありすき原

なを過るに、月は佐田の空に出て、森の

ともしび影うすく、いと神くし。夜は

木下了句選 下

鬼貫句選卷之五

木下了の旅記

(此旅記は「七車」所載「大居士」の
末につくもの也。校訂者記す。)

北窓の月は遠山の曉にそむき、南面の秋

不夜菴太祇考訂

日は軒をめぐる事はやし。我ころあ
らばめでたき閑居なるめれど、いやしけ
ればたのしみのおもひみじかく、静寥た
る秋の中く吾妻のかたにたびしたけ

牧方・葛葉のさとにふくれど、川浪まく
らの下をたゝきて、夢もむすばず、こゝ
ろすみて、

ひや／＼と月も白しや秋の風
曙ちかきころ淀のわたりをゆく。むら霧
川づらに立のぼれど、水車のすがたとは
見ゆるほどなり。

霧の中に何やら見ゆる水車
廿一日、ふしみにつく。朝ぼらけ打なが
め行に、町は所／＼家の隣、畠になりて
さびし。

伏見人唐黍がらをたばねけり
それより深草に行く。

少將屋敷

草露道なふして風はむか
しのほひもなく、今は
野人の車のみ往來す。

牛御亭車に落す草の露

元政舊菴

この沙門日蓮宗なれど常

の佛の数もならべず、た
だ釋迦のみたふと見え
たまふを

箔のない釋迦に深しや秋の色

里はなれて、出家ひとりつれだつ。ゆく
／＼のりの事など殊勝に聞えて、あふさ
かにいたる。むかし行基の鯖つけたる馬
にあひて、よみたまひける歌など、物が
たりしければ、かの法師行基に二問あり
とて發句す。

しほ鯖といづれか動く紅葉鮓

別れて關の明神にまいる。

琵琶の音は月の鼠のかぶりけり

案内する子をやとひて、三井寺より高觀
音にのぼる。所／＼の事念比に、夜は湖
水の月など、舌さへまはらずいひしも、
實馴ればおとなしき物をと愛らしくて、
大津の子お月様とはいいはぬかな
松本を過てもろこ川に至る。人の家のう
しろに柿の木ありて、

義仲塚

柿茸や木曾が精進がうしにて

また膳所を行はなれて、秋の田の面の物
あはれるの中に、

兼平塚

兼平が塚渺／＼とかり田かな

この所より道を右にのぼりて、

石山のいしの形もや秋の月

もどりに芭蕉がいほりにたづねて、

我々に喰せ椎の木もあり夏木立

長はしをわたりて、

瀬田の秋よこ頬寒しかどみやま

廿二日、草津を出て宿のわかれに發句す。

おもふに付所しな／＼ありて、句のすが
たはかはるやうなれど、みなおなじうつ
はものゝ中をめぐるて、心新しきはなし。
世の常の俗言をもつて作れば全誹諧にし
て、しかもその古きをのがるべしと、我
しばらく爰に遊ぶ。此地にも安心せば、
また例の病ひおこらん。只誹諧をのり物

にして常をわたる人あらば、行す止らずして誹謗もなく、やまひもなき大安樂界にいたらむ。

樂くと姥が屋根ふくや今年蕨

此發句にて伊丹風獨吟歌
仙あり。

(歌仙にあらず、廿句のもの也。校訂者)

石邊・水口は、この獨吟にまぎれて發句もなく、けふは土山にかり寐す。

廿三日、朝日よりさきに出て、

吹ばふけ櫛を買たに秋の風

白川橋といふをわたりて、爰にもとおもへど、趣向もなく、蟹が坂になる。それがためにとて、いさゝかの石塔あり。ほとりの松風は苔に閉ゆるばかりわびし。

つま白の石のあはれや秋の霜
近江のくにをわかれて、鈴鹿の峠につく。
常はこの所より湖水を見れど、けふは霧

ふかふしてあやなし。

狂歌

鬼貫が鈴鹿の山にきたればや

霧にくもりて見えぬ湖

汗かいて坂をくだる。また田村堂にのぼりて、瓦の奉加つく。

六文が月をもらすな田村堂

道すがら見るに、野山の色は新玉の空よりうつりかはるならひ、げに世の中の事はそれのみならずと、おもひくで鈴鹿川を渡る。

一とせの鱗もさびけり鈴鹿川

靄界來りぬ。いざとて行。彼もわれも骸は津のくにをきて、こゝろは今、關の宿のほとりに遊ぶ。野は草の茫くとして、かれかゝりたる中をみれば、歌仙集四日市といふ所にとどまりて、今日石薬師にていひたる句書つく。

國富ややくしの前の綿初尾

廿四日、桑名にいつ。風はけしくて船こ

はさに宿とる。座敷は海を請たる所なり。磯よりちいさき釣ふねの行衛おぼつかなく見やりて、蛤など焼せてこゝろのびけり。

風の間に鱸の膽させにけり

午のさがりに風なをりて舟だす。うち晴てそこくおもしろかりし物を、申のかしらより雨になりてういめす。漸日のおはるころ熱田にあがりて、こよひのやどかる。

熱田にて鱸の膽吐にけり

廿五日、なるみの宿をすぎて行さき、尾張・三河のさかひ橋あり。おはりのかた半は板をわたし、三河の地はつちばしなり。

發句合

尾張

板かけてさらに見するや草の露

此繼橋、おはりのかたより土をわたさば、かく

まてながめあるまじ。板
よりつちに行うつりて、
草は橋にさへうらがれぬ
と、秋のあはれを見せな
ん心尤深し。

三河

板わたる人に見するや草の露

此句、三河の人は尾張の
かたに板渡せるを見て、
橋を土になしたりといへ
り。意味左右同じきか。
されども草は三河の地に
うらがれて、あはれは此
くにの勝たるべし。

池鯉鮒をすぎてやはぎにつく。藪生たる
所、かの長者のあとなどいひて田の中に
見ゆ。やとひたる馬士の、是によそへて
望むほどに、耳ちかき世の一ふしをとり
て、

上瑠璃より田の番は夜る斗
わがこゝろの留主見まひすとて燈外見
ゆ。幸にこの人とならへて、ゆく／＼兩吟

して赤坂に宿とる。亥のさがりまで語り
て、また例の獨寐す。秋田縣外傳有。
談話略之。

廿六日、ほどなく御油の宿にかゝる。
猶行道の左右に大きな松はへつとき、
梢ひとつになりて、日の影さへもらぬほ
どなり。

たびの日はどこらにやある秋の空
よし田の町にて暮きゝて、
うづら鳴吉田通れば二階から
ひうち坂といふ所に休て、

霧雨に屋ねよりおろす茶の木哉
ふた川を過行。爰にも三河・遠江の境に
川橋あり。それを渡りて、

我橋は三河の露とまじりけり
白須賀こえて、荒井につく。濱名の橋の
あととなつかくして、

ことしにて濱名の橋は幾秋ぞ
また夜の心になりて

あの月やむかし濱名の橋の月

舟より前(舞)坂にあがりて、こよひは濱
松に明す。

二十七日、天龍を渡る。

御上洛の御時は此川舟橋になりぬと、船
頭の物がたりす。げに宗府が事を聞つた
えて、なつかしくなりたり。

我祖父も舟橋おがむ秋の水

池田の宿に遊也が石塔あり。老母のはか
なくやならんとしたひし女も、かくあは
れに見ゆるよと、世を觀じて、

秋の夢老母もゆやも我もまた

袋井を出て行道の田のほとりに、鵜おど
す人あり。されば伊丹の馬櫻が狂句に、

田の中に棒の一本立たるは

鵜をおどすか千の字か

かくおかしき事をおもひ出て、われもそ
の類にあつまる。

田の中に雪隠一ツ立たるは
箕を伏たるか鹽釜か

この興に掛川をこえて、けふのとまりは
日坂に定め。

廿八日、佐夜中山。

松杉のすげなふ立たる中に、
朝日影ちからなくさし入て
猶心ぼそし。

けふともに秋三日あり佐夜の山

菊川

承久三年の秋、中御門中納
言家行と聞えし人、つまあ
りて東へくだられけるに、
此宿にとまりけるが、昔は
南陽縣の菊、下流を汲てよ
はひをのぶ。今は東海道の
菊川の西のきしに宿して命
を失ふ、と、ある家の障子
にかゝれたりけると聞えき
たれば、あはれてその家
を尋ねるに、火のためにや
けて、かの言の葉も残らぬ
と、長明が書たることなど
おもひいで、我も家の障
子に、

家行は承久三年の秋述懷
を書、我は元祿三年の秋
其亡魂を弔ふ。

本來の障子はやけじ秋の風

大井川

雨遠く水なふしてこゆるに
やすし。

瘦すねに漸寒し大井川

また素龍にとはれて、まりこのやどの初
夜までに、半數血氣衰後句あり諸書之

廿九日、阿邊川を行とき、

東路の夜露こふたる紙子哉

道／＼わがこゝろふたつにわかれて、半
心はこの句冬也。惣じて露・月などの類、
季のかぎりある物にむすびては、いづれ
もその季にひかるゝならひ、しかれば夜
露こふ紙子まじく全秋ならずといふ。また半心
の曰、かなしひ哉、汝色を見ていまだそ
のいろに奪はるゝ事、尤物につれては四
季の間をわたる露・月なれば、句躰うち
聞えたる所秋なし。されば一とせの長月

は、はやけふ明日のかぎりしられて、この

宿を過るに、吾妻の秋の形見は夜露しみ

たる紙子にこそ残りりと、深くも秋をし

たひてなり。また此露冬にして聞所いさ

さか意味なし。句は是こゝろより作れる

すがた、爰に於て汝心をとるや、すがた

をとるや、といへば、實至極の秋なりし

物をと、心またひとつになりて、府中に

かゝる。爰は竹にて物作る家あまたなり。

虫籠を買て裾野に向ひけり

江尻を過て、清見寺にのぼる。

庭上秋深ふして佛閣靜に高

し。海原見やる所に望めは

こゝろのび、また心よはく

なれり。

秋の日や浪に浮たる三穗の邊

興津の浦の海士の蛸とるなど、都にはな

きと見る。猶あら波のいそづたひに、

道すなをならで、げに所の名もとおもふ

に、また古郷なつかしくて、

故郷や猶こゝろばそ親しらす

由井・かん原をこえて、富士川につく。

色さへ余所の水にかはりて、船のさる事

甚はやし。

不二川や目くるほしさに秋の空

よし原に臥て晦日の朝、

秋の日や富士の手變の朝朗

うき嶋が原をひさしく通りて、

浮しまや露に香うつす馬の腹

三しまの社を拜み奉るに、みな幾抱あら

むとおもふ斗の松杉、間なく立こもりて、

さびわたる神風に梢のしづく落るも遠

し。眞砂はその白玉にうるほひ、御池は

水の面青み立て、底おぼつかなくすごし。

雜

ちはやぶる苔のはへたる神^{うなせ}組

のぼり／＼て箱根のとうげにいたる。け

ふ三嶋の空にいたゞきたる雲ははるかな

れど、こよひはまた其うへに枕す。

十月朔日、宿を出て行。俗にこの山にて
死人にあふたる例おほしと、いひならは

すほどに、

雜

水海や我影にあふ箱根山

礧はたにさいの川原あり。念佛する法師

の家、所／＼にきこえ、往來の人の小石

あまた、つみかさねたるを見るにも、子

をしたふ數しられてものあはれなり。

お地藏のもすそに鳴や礧^{ちようご}衛

權現にまゐりて、

神の留主留主とおもへば神の留主

かしの木は皆人馬にもならず。そのほか

岩根道いくまがりもまがりて、中／＼鈴

鹿の坂はこの汗にも似ず。漸小田原にく

だる。

雜

氣辛勞や馬にのろもの小田原へ

實こゝろばかり行道なれば、落る事もな

きにと後悔してすぐ。曾我の里をとへば、

海道より十町ばかり左の山陰なりとい
ふ。

さむ空にいと／＼おもふや曾我の里

それより大礧にこえて、

とら御前今はつめたし石の肌

藤澤にとまりて、二日の朝遊行の御堂に

まいる。看經の聲たふとく、我も無念の

念佛す。

十月の二日も我もなかりけり

之道、けふは隙にできたりぬといひけ

るを、またとらへて、歌仙之証後ある
り諸説ある

かな川を過て、爰にも富士の人穴といふ

あなあり。口廣くあいて、おくの深さ闇

くて見えす。

人穴に折ふし寒し風の音

品川より鉄炮洲の御堂を見やりて、

むさしのは堂より出る冬の月

江戸に入て、日本橋を渡る。

いつもながら雪は降り富士の山

鬼貫句選跋

五子の風韻をしらざるものには、ともに俳諧をかたるべからず。こゝに五子といふものは、其角・嵐雪・素堂・去來・鬼つら也。其角・嵐雪おのゝ其集あり。素堂はもとより句少く、去來はおのづから句多きも、諸家の選にもること侍らず。ひとり鬼貫は大家にして、世に傳る句まれ也。不夜菴太祇としごろこの事を嘆きて、もしほ草こゝにかき集めて、數百句を得たり。たとはゞ滄海に網して、魚をもとむるがごとし。しこにかき集めて、數百句を得たり。たとはゞ滄海に網して、魚をもとむるがごとし。なをもれたるものいくばく歟侍らん。さるを鬼つら句選と題して、はやく世の好士につたへむと、例の氣みじかなる板もとは八文字屋自笑也。

七時の和巳せす方ふ月

三葉軒其集村書

卷之三

三

三

三

三